

## 1. ちんにくじゅうしい

1曲目に収録した「ちんにくじゅうしい」は物語の始まりを予感させる、フルートとピアノの二人の掛け合いで始まります。バッロク調のそのやり取りは自由のようで、冒頭のフレーズをモチーフに調和したイントロへと盛り上がって行きます。この曲の歌詞は今夜の夕食は何だろうと子供が問いかけ、お父さんが畑から野菜を持って帰って来るよと唄う。おじいさんの白髪が美しいと米寿の喜びを分かち合い、近所のおばさんが他人の子でも我が子のように大事にすると唄う。食べる事が楽しみで、おじい、おばあを大事にし助け合いの風景を綴った曲。今夜の夕食はなあに?と聞いた子供の目はきっと輝いていたに違いないというイメージからその瞳を表すような明るく躍動的なアレンジとなっています。ちんにくじゅうしいとは里芋の炊込み御飯のこと。

## 2. 西武門節（にしんじょうぶし）

にしんじょうとは北の門をさす。沖縄では北を「にし」と読む。この歌は首里の役人と遊女の情けを艶やかに男女の掛け合いで唄われる曲。女性が唄う「染みゆらば里前 くがらしぬぐとに」（染めるならば 貴方 焦がしたように濃くしてください）という歌詞から、遊女は役人を真剣に好きになり、また男性も「無藏や宿戻て 花ぬ遊び」（貴女は宿に戻り 華やかな遊び）と、嫉妬する歌です。複雑に乱れる感情を華やかな部分と、不安や嫉妬などの要素も加え、ドラマチックなアレンジで表現しました。アルトフルートの中低音で2声に分かれ、次第にフルートも重なりあう印象的な西武門節のフレーズは遊女、そして首里の役人、どちらの感情も表しています。

## 3. 月ぬ美しや（つきぬかいしや）

八重山民謡を代表する美しいメロディーの曲。歌詞にある、「東から上りおる大月ぬ夜 沖縄ん八重山ん照いらしょり」（東から上がっておいでになる満月の夜 沖縄本島も八重山もお照らし下さい）という気持ちのまま、壮大に演奏しました。竹内大輔の美しいピアノソロが魅力的です。

## 4. 夜間飛行

沖縄の版画家・名嘉睦稔が沖縄の星空の下で即興で歌った歌を元に生まれた TINGARA の名曲。「風や風なとて  雨やまた雨やりば（風は風として 雨はまた雨として）雲や雲なとて 星は星々とう（雲は雲として 星は星々と）なまんあたる事に なまんあたる事に（今あるがままに）」と歌う様に後半のアルトフルートの2声、さらにフルートの2声が重なり合う場面は自然や人々が調和してゆく様を表現しています。

## 4. 大村御殿（うふむらうどうん）

「耳切坊主」という別名もあるわらべうた。「大村御殿の角に耳切坊主が立っていてるぞ、泣いている子供は耳を切られるぞ~」と子供を泣き止ます子守唄。緊張感のあるハーモニーから懐かしい気持ちになるハーモニーに移行し、次第にボサノバ調に盛り上がってゆく。その美しいメロディーから耳切坊主の恐怖より、いい夢が見れそうな曲にアレンジしました。

## 5. Makes me ...

故郷の平敷屋にあるホワイトビーチ。小さい頃の思い出に年に一度だけゲートを通れる夏の日があった。白い砂浜とバーベキューの匂い。隣近所みんなで行ったビーチパーティの思い出。その思いに浸りたくてもう一度ホワイトビーチに行き、高台から眺めるとアメリカ人のファミリーがカラフルなパラソルが白い砂浜に並べていた。平敷屋の海なのに、生まれた時から柵の向こうの砂浜へ自由に入れない事を理不尽に思う。しかし、故郷に帰ると私を迎えてくれる懐かしい風と風景。複雑な私の心の一曲です。

## 7. わかりがなさ

ワカリ（別れ）ガナサ（哀さ）2月の寒い日。きっとこれが今年最後の寒さ（わかりびーさ）だろうと思うと、急に愛おしく感じました。別れには色々な別れがあります。ほんの数時間の別れ。また次がある別れ。一生会えない別れ。その中でも愛おしい別れの感情を「わかりがなさ」と呼びます。アルトフルートのみで演奏される唯一の曲です。派手に盛り上がる事なく、中低音でしっとりと哀しみを表現しました。

## 8 KAJADIFU

琉球古典音楽「かぎやで風節」にインスピアされて出来た曲です。印象的な「かぎやで風節」のイントロは「調和」そのもののフレーズではないかと考えました。

同じハーモニーで進行するもフルートとピアノは共に自由にフレーズを重ねます。それは、それぞれの物語であり、藻搔く様に現在、世の中で起きている事を表現しています。後半は「かぎやで風節」のイントロが流れ、一瞬だけ調和の場面があります。この曲の冒頭と最後には琉球王朝の時代から代々伝わる金細工の音を入れました。琉球王府の命で作られた金細工と、その王の前で演奏されたかぎやで風節。沖縄から消えてはいけない、無くしてはいけない音をここに残します。決して忘れてはいけない琉球の心を伝えたいという想いで音を重ねています。

今現在、金細工の当主である又吉健次郎さんは初代から数えて7代目となります。琉球王朝時代より変わらない音、ジーファー（かんざし）を作る為に銀を叩く音は調和そのものであり、琉球の財産（宝音）です。

しかし、残念なことにこの文化を守る次代の継承者は現在のところいないといいます。